火曜日　11月29日　煉獄にいる聖徒たち

ローマ・カトリック教会は、地獄に落ちるほどではないが、まだ天国に行く準備もできていない死者は、煉獄で罪を清め、その後に天国に上ることができると考えています。彼らの煉獄での苦しみは、彼らの愛した者たちの祈りと秘跡〔カトリック教会用語：教会で執り行われるキリストの神秘を目に見える形で現在化する儀礼〕によって軽減されると言います。

『カトリック公教要理』は煉獄についてはっきりと次のように述べています。「神の恵みと友愛のうちに死んだ者で、なお完全に清められていない者すべてに、実に永遠の救いが約束されている。しかし彼らは死後に清めを経験する。そうして彼らは、天の喜びに入るに必要な神聖さに達するのである」（『カトリック公教要理』291ページ、英文）。

さらに彼らの苦しみは彼らが愛した者たちの祈りや、他者による死者のための行いによって軽減されるとも述べています。「教会はまた、施し、免償、秘跡の行為を死者のために行うよう命ずる」（同291ページ）。

問3　コヘレト9：10、エゼキエル18：20～22、ヘブライ9：27を読んでください。これらの聖句はどのように煉獄説に反論していますか。

煉獄の教理は、燃える地獄という観念や死者のために祈るという異教徒の習慣を結合させたものです。この教理は、聖書の次の教えを信ずる者たちにとっては受け入れられるものではありません。（1）死者は無意識のうちに墓の中で休んでいる（コヘ9：10）。（2）1人の堕落した人間の義は他の堕落した人間に移されることはない（エゼ18：20～22）。（3）私たちの唯一の仲保者はイエス・キリストである（1テモ2：5）。（4）死の後には最後の裁きが続き、〔その間に〕地上の人生で犯した罪を悔い改めるチャンスは二度とない（ヘブ9：27）。

さらに、深刻な影響は、聖書に反する煉獄の教えが、神のご性質をゆがめているということです。「自身の堕落以来、サタンの働きは天父を誤解させることにある。彼は霊魂不滅の教理を提唱し……、永遠に燃える地獄という考えを生み出し、煉獄を発明した。これらの教えは神のご品性を曲解させ、神は厳しく、復讐（ふくしゅう）に燃え、横暴で、決して赦さない存在であると主張する」（エレン・G・ホワイト『原稿51』、1890年、英文）。

煉獄や永遠の責め苦のような誤りは、教理の重要性を教えています。なぜ私たちが誰を信じるかだけでなく、何を信じるかが重要なのでしょうか。